

「大腸ポリープ・ポリポース—臨床と病理」

東京大学教授・第1外科 武 藤 徹一郎

弘前大学教授・第1内科

吉 田 豊

武藤徹一郎教授がこのたび「大腸ポリープ・ポリポース—臨床と病理」という、まことに時宜を得た、内容の濃い専門書を出版した。同教授の同じ出版社からの「炎症性大腸疾患のスペクトル」(1986)の姉妹書ともなり、揃えて大腸疾患の座右の書としてお勧めしたい。

時宜を得たと言うのは、1992年厚生省が、大腸集検を老健法第3次計画に導入したが、この集検で発見される多数のポリープ(腺腫性ポリープ)の扱いなどで新たな問題が起こっており、本書がこれに答えるうえでも重要な役割を果たすと考えるからである。また、発見癌についても以前から論議を呼んでいる早期m癌の取り扱いがあり、その臨床的、病理学的意義については種々意見の多いところである。著者はこの辺のところを、初めの章で頁を多く割き、概念の説明から用語の使い方まで、わかりやすく述べており、大腸ポリープや大腸癌を診療する消化器医には是非一度読んでもらいたい内容である。

本書の特色の1つは、目次に続いて14頁にも及ぶカラー図譜が内視

鏡像を中心に載せられている点である。さすがに第一級の内視鏡マンである著者の選択とあって見事な科学写真譜であり、それぞれの解説も簡単直截で、初心者にもベテランにも通ずる教育資料である。必要なところには組織像を織り混ぜ、テキストとしての目的を最大限に発揮している。

この図譜に続いての第1章では上述の概念と歴史的背景を述べているが、第2章ではMorson病理学を継承する著者の腺腫 dysplasia をめぐるの真摯な詳説があり、本書の必読の書としての価値を高めている。この章では更に大腸ポリープの疫学にも10頁を割き、次いで腺腫以外の過誤腫性ポリープ、炎症性ポリープ、過形成性ポリープ、直腸孤立性潰瘍など、ポリペクトミー標本や手術標本と対比させながら、著者の病理組織学の造詣の深さをうかがわせるモノクロ組織像をふんだんに並べ、読者をして極めて理解しやすい内容となっている。

第3章のポリポースの組織分類では大腸腺腫症を中心に、その概念から遺伝様式に至るまでの詳説があり、続いてほかのポリポース症候

群を1つ1つ組織像を含めて解説しており、これら症候群の概念を整理したり、診断を確定するうえでも実に適切な専門書である。

本書は第7章までであり、字数の都合で第4章以下については省略するが、内視鏡的ポリープ摘除術の実際から標本の作り方まで細かく書かれている点などは強調したい。また、巻末には項目別に膨大な数の引用文献を載せており、学説などのoriginを求めるための“孫引き”にも適した良書である。

通読して、本書は著者の学者であり臨床家である側面をよく表している好著であると思う。医学者は、臨床部門の学者であっても、とかく狭い領域での研究に熱心なあまり、広く臨床から病態を俯瞰することに欠けることがある。しかし著者は臨床家の目で学問をしておられる。それが本書全般を通して特長となってにじみ出ている。消化器病を学び診療しておられる多くの同僚諸氏に、本書を心から推薦したい。

● B5 332頁 図59 写真322
原色図94 1993 定価14,935円
(税込) 円400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)